スマホ・PCで動画公開
あす全面公開

宮古市の東日本大震災の犠牲者の行動を再現したサイトのデモ動画は、パソコンやスマートフォンで見られます。スマホのサイトは2次元バーコード（QRコード）からアクセスが可能です。パソコンは岩手日報社ホームページの震災関連のサイト（http://www.iwate-np.co.jp/311shinsai/shinsai_top.html）からアクセスできます。9日には角度や場所を自分で操作できる特設サイトを全面公開します。

命を守る5年の誓い
・とにかく逃げる　逃げたら戻らない
・避難場所を過信せず、少しでも高い場所へ
・助かるための避難訓練を
・「ここまで津波は来ない」は通用しない
・災害弱者を救うルールづくりを

忘れない

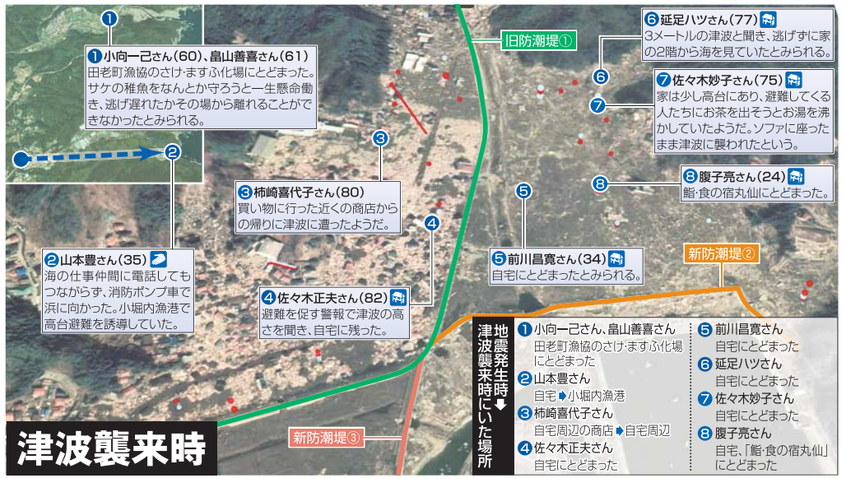
犠牲者の行動記録

震災5年

④宮古市

岩手日報社と首都大学東京の渡辺英徳准教授の研究室が行った「東日本大震災の犠牲者の行動再現」で、宮古市田老は巨大防潮堤への過信から自宅から動かない人が多かったことが分かった。強い地震があったら「とにかく逃げる」という避難の重要性があらためて示されたといえる。同市の市街地では避難誘導中に犠牲となった人も相次ぎ、要支援者のルール作りの大切さが見えてきた。

田老の巨大防潮堤を過信 自宅離れず



逃げる意識鈍らせる

教訓
動きを読み解く

田老の犠牲者73人のうち、津波襲来時に自宅またはその付近にいたのは71・2％。沿岸全体の54・9％に比べ際立って高い。

自宅で犠牲となった佐々木正夫さん（82）は、警報で津波の高さを聞き、自宅にとどまった。延足ハツさん（77）も逃げずに家の2階から海を見ていたという。中には、地震後に津波を見ようと防潮堤に上った人もいた。

昭和三陸大津波（1933・昭和8年）を受けて、昭和整備が進められた高さ10㍍、総延長2・4㌔の防潮堤。犠牲となった人たちは、旧防潮堤①の内側のほか、旧堤と新堤の間の土地に住んでいた。防潮堤建設によって居住制限もかかった住宅地だが、最大16・3㍍の津波によって、その10分の11が破壊された。

「ここは大丈夫だろう」。巨大防潮堤が、海と陸とを分断し、人々の心に油断を生んだのだろう。

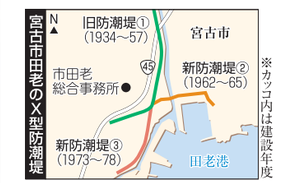
震災前、田老の市街地は暴風の目に警備され、高台に向かって道路が放射状に延びるなど、避難を重視した構造になっていた。だが、犠牲者の多くは、地震後にすぐ避難しなかった。

甚大な被害は、大津波の際は防潮堤が避難までの時間を稼ぐ効果があったことを物語っている。

「津波太郎（田老）」の異名で、津波防災の先進地として有名だった田老が示す教訓は無視できない。

震災後、県内では10分の1以上の巨大防潮堤が各地で造られている。コンクリートの耐用年数は50年とされる。構造物は確実に劣化が進む。だが、津波を恐れるその「心」まで風化させてはいけない。

（ヒアリングした人の年齢は当時）



田老の防潮堤　高さ10㍍の三つの防潮堤を中央部で接続し「X型」としていた。旧防潮堤①は昭和三陸大津波を受けて1934～57年度に建設され、長さは1350㍍、工事費は1億1553万円。新堤②はチリ地震津波を受けて62～65年度に建設され、582㍍、1億2800万円。新堤③は73～78年度に建設され、501㍍、3億8170万円。今回の震災による津波では②の部分が倒壊した。倒壊は防潮堤の向きや構造、維持管理不足によるコンクリートの劣化など、複合的な要因が指摘されている。

※カッコ内は建設年度

右手の海側から襲来した津波は旧防潮堤を乗り越え、商店街や住宅を破壊した＝2011年3月12日、宮古市田老

記憶
遺族の思い

佐々木トモさん（岩泉）田老で夫が犠牲
安心感、油断あった…

避難時に持つリュックサックの中身を確認する佐々木トモさん。「揃えたら逃げる」の防災意識の徹底を実践する＝岩泉町小本

5年前、宮古市田老の自宅近くで大きな揺れを感じた佐々木トモさん（79）は、帰宅した夫正夫さん（当時82）に避難を促した。だが正夫さんは頑として動かない。「（防災無線で流した）3㍍の津波なら心配ない」。それが理由だった。

津波は高さ10㍍の巨大防潮堤を越えて、夫の居る自宅を押し流した。説得を諦めて高台に向かった佐々木さんは命からがら助かった。

「あれはいいもので、悪いものでもある。立派な堤防潮堤に守られている安心感から『まさか』と感じる。住民に油断があったのだろう」と感じる。地元では過去の大津波で被災した経験から住宅を高台へ移転。防災意識の希薄化が被害につながったとも見る。

3年前、長男が暮らす岩泉町小本に自宅を再建。高台に住む今でも近くに薬や衣類などを入れたリュックサックを準備している。「揃えたら逃げるのが基本。津波はいつ来るかわからないから」

弱者救うため浸水域へ

焦点
宮古市街地

宮古市の市街地では高齢者や患者ら災害弱者を津波から救おうと浸水域に向かい、亡くなった人がいた。要援護者と一緒に避難中に巻き込まれ、犠牲になった人もみられた。

宮古署の警察官村上洋巳さん（43）は上司と署にUターンで勤務。津波に備えて避難誘導、救急車で県立宮古病院に搬送中の急病人を2階建てのアパートに避難させようとしていた際に津波が襲った。

東日本大震災で殉職した警察官の多くは避難誘導、被害情報の収集中に被災し、本県では村上さんを含む11人が命を落とした。人を救う公的職務を担う警察官以外にも、家族を救うために犠牲になった住民もいた。

地震発生時、山側の自宅にいた佐々木静子さん（75）は介護するため、海側にある実家に車を走らせ襲われた。足が不自由だった隣居桂子さん（81）は揺れが収まるのを待って避難したが間に合わず、宮古市では10・4％が災害弱者援護者と共に避難して被災。県内の犠牲者で地震後に「家族や知人を迎えに行った人が8・6％いた。

地震発生から津波が到来するまでの短時間で、災害弱者だけでなく、支援する側の犠牲を最小限にとどめるには地域防災力の強化だ。

高齢化に伴い、災害時に助けが必要となる人は増える。国が市町村に作成を義務化した避難行動要支援者名簿の活用だけでなく、普段からの住民同士のコミュニケーションや声掛けなどを通した共助の実践、そして、一人でも多くの命を守る意識になる。

宮古市
人口　5万6436人
（1.1年3月比2793人減）
死者　420人
不明者　94人
関連死　54人

延べ宮古湾を形成している。総面積は県内市町村で最大、平地が少なく、森林が約9割。東日本大震災では沿岸の6地域が被災し、死者・行方不明94人、市内最多の181人が犠牲に。「宮古広域生活圏の核となる宮古地区の中心市街地にも津波が押し寄せ、JR宮古駅南側へ移転になる計画だ。重茂地域では水産業施設が被災し、道路損壊などで集落が孤立した。

高齢者ほど避難せず

年代別にみる津波犠牲者
海から遠い地域で顕著

宮古市田老の犠牲者の年代
●60歳以上
●60歳未満
三陸鉄道北リアス線
田老一中
市田老総合事務所
45
堀内川
田老港
田老川
N

宮古市中心部の犠牲者の年代
●60歳以上
●60歳未満
磯ノ崎小
45
宮古港
宮古市役所
10
シートピアなあど
閉伊川
藤原小
JR山田線（休止中）
N

宮古市田老の犠牲者の年代
●60歳以上
●60歳未満
三陸鉄道北リアス線
田老一中
市田老総合事務所
45
堀内川
田老港
田老川
N

宮古市田老と宮古市中心部の犠牲者の年代
●60歳以上
●60歳未満
磯ノ崎小
45
宮古港
宮古市役所
10
シートピアなあど
閉伊川
藤原小
JR山田線（休止中）
N

宮古市田老と宮古市中心部の犠牲者の年代
●60歳以上
●60歳未満
三陸鉄道北リアス線
田老一中
市田老総合事務所
45
堀内川
田老港
田老川
磯ノ崎小